

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370166

研究課題名(和文)一九五〇年代アメリカの映画・テレビにみる「男らしさ」の変容

研究課題名(英文)The Transformation of Masculinity in American Movies and Television of the 1950s

研究代表者

飯岡 詩朗(IIOKA, Shiro)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：90345728

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第二次世界大戦後から1950年代の映画とテレビにおいて「男らしさ」の表象がどのように変容したのかを、とくに「家庭的」な男性像に着目し、同時代の多様なテキストの横断的な分析を通して、具体的に明らかにすることを目的とした。1950年代アメリカにおいては、映画・テレビの垣根を越え、戦前・戦中までの「男らしさ」の喪失を受けとめる新たな/別の「男らしさ」を描くようになったが、ほぼ同時期に、映画は1940年代までに確立された表現スタイルを多かれ少なかれ廃棄し、多くの場合、テレビの人気に対抗する/順ずる新たな/別の表現スタイルを模索するようになった。

研究成果の概要(英文)：Focusing on the images of domesticated males, this study explores how representation of masculinity in American movies and television transformed during the 1950s. With a fresh look at diverse texts as literature, theatre, movie, television, this study tries to show the emergence of new/alternative masculinity on and off screen in the 1950s, which has been recognized as the lack of masculinity during the 1940s. This study also examines the transformation of movie industry in the rise of television industry, and illustrates how movies of the 1950s experienced the marked changes both in representation of masculinity and in cinematic styles.

研究分野：映画学

キーワード：映画 ア性 テレビ アメリカ シチュエーション・コメディ ハリウッド 男らしさ 1950年代 間メディ

1. 研究開始当初の背景

1950年代のアメリカでは、デイヴィッド・ハルバースタムが『フィフティーズ』(1993)の中でスローン・ウィルソンによる大衆小説『灰色の服を着た男』(1955)と社会学者C・ライト・ミルズ『ホワイト・カラー』(1951)を併置し同一の章で論じていたように、大衆文化の領域においても、ウィリアム・H・ホワイト『組織のなかの人間』(1956)やデイヴィッド・リースマンの『孤独な群衆』(1961)などの社会学の著作に代表されるアカデミックな領域においても、「豊かな社会」の中で閉塞感や焦燥感に苛まれる男性の苦悩に焦点化したテキストが数多く登場した。

また、『灰色の服を着た男』が翌年に当時の人気スターであるグレゴリー・ペックを主演に映画化されることなどからも明らかのように、同時代のハリウッドも同様に男性の苦悩を描く物語に関心を寄せていたし、同時代のテレビで放送された家庭を舞台とするシチュエーション・コメディ(シットコム)の多くも、笑いによって視聴者に問題を直視させないように工夫しながらも、同様の主題に取り組んでいた。

こうした1950年代の男性像の変容をめぐる研究は、とくに映画研究においては、1990年代後半以降、少しずつではあるが、登場してきている。その代表的な例として、Steven Cohanの*Masked Men* (1997)、Stella Bruzziの*Bringing Up Daddy* (2005)、Mike Chopra-Gantの*Hollywood Genres and Postwar America* (2006)等を挙げることができる。Cohan (1997)は、ジャンルを限定することなく、映画が描き出す男性像が戦後いかに変容したかを鋭く分析し、一方、Chopra-Gant (2006)は、Cohan (1997)が必ずしも重視しなかった家族像と男性像の関係にも焦点をあてた分析を行っている。共に注目に値する先行研究ではあるが、神経症的な男性像に重点が置かれ過ぎているように思われる。またBruzzi (2005)は二者と着眼点が異なるが、1950年代に特化した研究ではない。言い換えると、先行研究は戦後の男性像の変容を「男らしさ」の危機の表象と見なす傾向が強く、それを概ね否定的にしか捉え切れていない点で不十分である。本研究は、それを新しい/別の「男らしさ」の誕生として肯定的に捉え直そうというものである。

本研究代表者は、平成20年からハリウッド映画における男性表象に関する研究に着手し、その成果を学会で発表してきた。とくに、平成21~22年の日本映像学会大会での発表は本研究に直接繋がるものである。まず、平成21年度の発表では、ダグラス・サーク監督の*There's Always Tomorrow* (1956)を分析し、内部指向的(inner-directed)に自分の「理想」とする温かい家庭を追い求めるのではなく、自分にとっては冷たい家庭と感じられようとも、他人指向的(other-directed)に妻

や子にとっての「都合のよい」家庭を支えるために働く夫/父親像を演じることでしか「男らしさ」を表現できない「新しい」男性の誕生を作品に見出した。

続く平成22年度の発表では、ヴィンセント・ミネリ監督の『花嫁の父』(1950)とその原作小説および、同時代の教育映画や雑誌(記事および広告)等を横断的に分析することをとおして、家庭化(domestication)した男性が、妻や娘の浪費を嬉々として支えることで「男らしさ」を発揮するようになっただけでなく、同時代の雑誌(『ライフ』誌など)で描き出したように、かつては女性が担っていた消費活動の主体となることで「男らしさ」を発揮するようになる姿を1950年代前半の文化表象に見出した。

また、本研究代表者は、当時人気を博したテレビ・ドラマのシチュエーション・コメディ『パパはなんでも知っている』(1954-1960)を分析し、実際にそこで描かれる父親が、家族の気遣いによってはじめて「威厳」を保ちうる存在として描かれていること、さらには、子どもの養育が最優先される家庭を「牢獄」のように感じるという夫婦の不満が焦点化されることすらあることを見出した。こうした家族像や父親像、また夫婦の苦悩は、表現スタイルは異なるものの、同時代のハリウッドで製作された家庭を舞台とする(現代においては)「メロドラマ」と分類されるジャンルの映画にも連続していることをふまえれば、当時の映画をテレビと切り離して論じることは不可能だと再認識するにいたった。

また、同時代の結婚や家族・家庭に関する文献を渉猟することで、当時の大衆雑誌においても、結婚生活や家族の「理想」が頻りに議論され、科学を標榜した「専門家」の言説が人口に膾炙していた事実に触れ、出版メディアも含めた文化表象の横断的なアプローチを特徴とする本研究の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、第二次世界大戦後から1950年代のアメリカ文化において、「男らしさ」の表象がどのように変容したのかを、とくに夫や父親の家庭化(domestication)や、消費者としての主体化に着目し、同時代の映画やテレビを中心に、雑誌(記事・掲載写真および広告)等の大衆メディアから、文学や社会学の著作まで、多様なテキストの横断的な分析をとおして、具体的に明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

研究対象である1950年代アメリカの表象文化に関する資料を、国内および国外で収集し、分析・考察の後、論考をまとめ発表した。

国内では、刊行された文献および映像資料を収集し、1950年代およびその前後における

「男らしさ」の変容を整理するとともに、同時期のアメリカの映画およびテレビ番組における男性表象の変容を整理した。同時に、同時期のアメリカにおける映画とテレビの競合に着目し、テレビの台頭と軌を一にする映画の産業構造と表現スタイルの変容と実際に同時期に製作された映画作品への影響を整理し、前述の男性表象の変容と関連づけて分析・考察した。

国外では、マーガレット・ヘリック図書館（アメリカ映画芸術アカデミー）、南カリフォルニア大学図書館、ニューヨーク公共図書館、インディアナ大学図書館において一次資料の調査・収集をおこなった。マーガレット・ヘリック図書館においては、おもに1950年代のファミリー・ドラマ、ファミリー・コメディ、ファミリー・メロドラマの諸作品に関する映画製作倫理規定（プロダクション・コード）管理局の文書の調査・収集に加え、同時期を代表する映画監督である、ヴィンセント・ミネリおよびピリー・ワイルダーの諸作品の脚本の改稿過程を調査した。南カリフォルニア大学においては、同時代を代表する監督である、ダグラス・サークおよびフリッツ・ラングの諸作品の製作過程の内部文書や宣伝資料の調査・収集に加え、同時期のTV Guideにおけるルシル・ボールの主演映画に関する記事の調査・収集をおこなった。ニューヨーク公共図書館およびインディアナ大学図書館では、1940年代から1960年代にかけて断続的にハリウッドで脚本家として活躍し、フリッツ・ラング監督作品（*Clash by Night*）の原作となった戯曲の作者でもあるクリフォード・オデッツの創作活動に関する一次資料の調査・収集をおこなった。以上の調査・収集した文書の整理・分析・考察をおこない、論考を、学会発表および論文発表をとおして公表した。

4. 研究成果

第二次大戦終結後から1940年代末にかけての、戦争によって傷ついた「男らしさ（男性性）」を直接的に描く作品（その代表例はウィリアム・ワイラー監督作『我等の生涯の最良の年』である）が登場するが、1950年代に入ると、「豊かな社会」の中で閉塞感や焦燥感に苛まれる男性の苦悩に焦点化しながらも、そうした苦悩を抱く男性を同情的に描く（哀しむ）以上に、滑稽に描く（笑う）作品が登場する。言い換えるなら、「男らしさ」の喪失を悲劇的に描くのではなく、それを喜劇的に描き、喪失を受けとめる（embrace）ことこそを新たな／別の「男らしさ」として描く作品が登場するのだ。本研究では、その代表例を、1950年代を代表するメロドラマ（映画）「作家」として名高いヴィンセント・ミネリ監督作のファミリー・コメディ『花嫁の父』（1950）に見出し、詳細な映画テキストの分析とともに、先行する関連のテクス

ト（原作小説、その大ヒットを受けての雑誌での写真特集）の詳細な分析を行い、本作が「男らしさ」の表象の転換点を鮮やかに描き出すだけでなく、ヴィンセント・ミネリの「作家」としての特質以上に、映画以外の映像メディア間での表現の参照や流用が顕著であることを明らかにし、映画という一つのメディアに限定しない間メディア性の観点からの分析の重要性を指摘した。なお、その成果は、「遅れて来た男 『花嫁の父』（1950）における観客のいない演技者」という単著論文で発表した〔文献情報は下の5の項を参照されたい〕

また、本研究では、「男らしさ」の表象との関連で、1950年代のファミリー・ドラマ、ファミリー・コメディ、ファミリー・メロドラマにおけるエンディングの変容についても考察した。アメリカ映画製作倫理規定管理局（以下、管理局とする）の審査では、規定の分析シートを用いて、作品の諸要素を分類しているが、その中にはエンディングを、「ハッピー／アンハッピー／道徳的／その他」に分類する項目がある。もちろん、「ハッピー」でなければ審査にとおらない、ということではないが、「ハッピー・エンディング」は古典的ハリウッド映画の基本的な型であり、多くの場合、男女が（再び）結ばれることをとおして「ハッピー・エンディング」が描かれてきた。

管理局の審査は杓子定規なものではけっしてなく、時代の変化に応じて、直接的には、大衆の道徳観・倫理観の変化に応じて、審査基準も変化してきた。エンディングの分類（ハッピー／アンハッピー／道徳的／その他）についても同様であり、1950年代以前においては、たとえ楽天的で型どおりであっても、まったく信じられないほどの「ハッピー・エンディング」（と分類される作品）はきわめてまれであったが、1950年代以降、管理局の分析シートにおいて「ハッピー・エンディング」に分類されながら、同時代の映画評で公然と「とうてい信じ難い」「信憑性がない」と批判される作品が登場してくる。さらに、1950年代後半以降では、「ハッピー」に分類しながら、その前に「多かれ少なかれ（more or less）」と付記される作品も登場してくることを、一次資料の調査・分析等をおして明らかにした。

本研究では、管理局の分析シートにおいて「ハッピー・エンディング」に分類されながら、同時代の映画評で公然と「とうてい信じ難い」「信憑性がない」と批判される作品の代表例として、フリッツ・ラング監督作品『クラッシュ・バイ・ナイト』をより詳しく考察した。妻の不貞をめぐる2人の男性（夫と愛人）が争い、1人が殺害されるという悲劇的なクリフォード・オデッツの原作を、夫が愛人を赦し、妻も赦すという非・劇的（undramatic）な改変した本作は、現代の観客＝批評のみならず、公開当時の観客＝批評に

おいても、その「ハッピー・エンディング」が「とうてい信じ難い」「信憑性がない」と批判されているが、そのエンディングが「終わり」よりも（苦難の）「続き」を予期させる点において、同時代の連続ドラマとの親近性が高いことを映画およびテレビのテキスト分析をとおして、また、その「とうてい信じ難い」「信憑性がない」エンディングにこそ、作り手（それも、監督＝作家のフリッツ・ラングではなく、独立系プロデューサーのジェリー・ウォルド）がなみなみならぬ力を注ぎ、新しい／別のハリウッド映画を作り上げたと信じていたことを一次資料の調査・分等をとおして明らかにした。なお、その成果の一部は「ハッピー・エンディングとは何（であった）か 1950年代アメリカのファミリー・ドラマにおける「幸福」」として単独の口頭発表を行なった〔文献情報は下の5の項を参照されたい〕また、その発表をもとに、論文を執筆中である。

さらに、本研究では、新たな／別の「男らしさ」が、同時代のテレビ番組、とりわけシチュエーション・コメディ（シットコム）において優勢であることを指摘するとともに、そうした「男らしさ」を描く映画の多くが、1950年代よりも前に確立されたハリウッド映画の表現スタイルを多かれ少なかれ壊し、新たなスタイルを模索・実験する作品となっていることを、テレビの人気番組の内容・形式を再利用する例（ヴィンセント・ミネリ監督作『ロング・ロング・トレイラー』（1954））や、1953年に導入された新たな撮影・上映方式であるシネマスコープの横長画面の構成上の工夫の例（ビリー・ワイルダー監督作『七年目の浮気』（1955））の、脚本の生成過程を含む多角的な分析・考察をとおして明らかにした。なお、その成果の一部は、「テレビ／映画批評としての *The Long, Long Trailer* (1954)」、「分身／分裂する男——『七年目の浮気』とワイドスクリーン」として単独の口頭発表を行うとともに、前者は「テレビに順ずる／抗するハリウッド——『アイ・ラブ・ルーシー』の二度の映画化をめぐる」として単著論文を発表した。また、後者については論文を準備中である。

以上の分析・考察から 1950年代アメリカにおいては、映画、テレビの垣根を越えて、戦前・戦中であれば、「男らしさ」がないとみなされるような男性像を、新たな／別の「男らしさ」を持つ男性像として描くようになったが、ほぼ同時期にハリウッド映画はその産業構造と映像技術を変化させ、間メディア性を高めた新たな／別のハリウッド映画のスタイルを模索するようになったことが明らかになった。新たな／別のハリウッド映画の登場にあたってもっとも大きな役割を果たしたのは、「ニュー・メディア」としてのテレビであり、テレビの人気に対抗するにせよ順ずるにせよ、新たな／別のハリウッド映画はテレビの「ニュー・メディア」性に応

答することを余儀なくされた。「ニュー・メディア」としてのテレビをめぐる言説および、その言説へ応答としての映画をめぐるのは、平成 28 年度以降の新たな研究課題において分析・考察が行われることになるだろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) 飯岡 詩朗「テレビに順ずる／抗するハリウッド——『アイ・ラブ・ルーシー』の二度の映画化をめぐる」『応用社会学研究』第 58 号 (2016): 105-118 ページ [査読なし]

(2) 飯岡 詩朗「遅れて来た男——『花嫁の父』（1950）における観客のいない演技者」『信州大学人文科学論集』第 2 号 (2015): 197-217 ページ [査読あり]

〔学会発表〕（計 3 件）

(1) 飯岡 詩朗「分身／分裂する男——『七年目の浮気』とワイドスクリーン」日本映像学会第 42 回大会、日本映画大学（川崎市）2016 年 5 月 28 日

(2) 飯岡 詩朗「テレビ／映画批評としての *The Long, Long Trailer* (1954)」第 41 回大会、京都造形芸術大学（京都市）2015 年 5 月 31 日

(3) 飯岡 詩朗「ハッピー・エンディングとは何（であった）か 1950 年代アメリカのファミリー・ドラマにおける「幸福」」第 40 回大会、沖縄県立芸術大学（那覇市）2014 年 6 月 7 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯岡 詩朗 (IIOKA, Shiro)

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授
研究者番号：90345728